

第二分科会「少子化対策」

第2部

これより第二分科会 少子化対策 第2部を始めさせていただきます。私は引き続き、第二分科会の司会進行役を務めます、千葉県市町村課の林と申します。どうぞよろしくお願いいたします。事例発表の後、質疑応答の時間を設ける予定です。

オンライン参加の方もご質問いただけますので、質問のある方は、質疑応答時に画面下のQ&A ボタンでの質問の入力をお願いいたします。なお、時間の都合上、全ての質問にお答えすることはできませんのでご了承ください。また、ご質問に関しては、会場からいただいたものを優先させていただきます。

ここで登壇されている方々をご紹介します。皆様から向かって右側、千葉県旭市長 米本弥一郎様より事例をご発表いただきます。続きまして、皆様から向かって中央、奈良県三宅町長 森田 浩司様より事例をご発表いただきます。そして、コーディネーターを務めていただくのは、学習院大学文学部教授・東京大学名誉教授 秋田 喜代美様です。

ここで秋田様のプロフィールを簡単にご紹介させていただきます。秋田様の専門は教育心理学、学校教育学、保育学で教育学博士です。現在、こども家庭庁こども家庭審議会会長。文部科学省中央教育審議会教員行政部会長、同教育課程副部会長を務められております。また、日本保育学会第7代・第9代会長を歴任され、著書には「保育の心もち」などがございます。

これより先の進行役は秋田様にお願いしたいと存じます。秋田様、よろしくお願いいたします。

学習院大学文学部教授・東京大学名誉教授

秋田 喜代美 様

はい。林様、ご紹介をどうもありがとうございます。これから二つの事例をご発表いただきます。今の時間から、こちらの分科会にご参加くださいました方もおられると思います。

少子化は非常に急ピッチで進んでいるということは、先ほどからお話がありましたところでございます。まさに待ったなしというところで、どういう施策を打つのかということにつきまして、国の方でも、全世代型社会保障構築会議やその提案などもあり、今回スウェーデンと同じ3.6兆円の投資が子どもへの支払額の比率が、ほぼスウェーデンと同じという先進諸国トップ並みに日本はこの少子化のために施策を打っているところでございます。

児童手当の拡充、それから保育の充実、処遇改善など様々な取組を切れ目ない支援ということできさせていただくための施策を打っているところでございます。

しかしながら、全国の一般的なものだけでは丁寧に住民の方に手が届かない、そういうところをまさに基礎自治体の皆様が、いろいろな知恵を汲み取り、いろいろな施策を打ってくださることにより、やはりもっと市、町、村で住み続けたいという若い方が増えていく、そういうことが市町の希望を作るのではないかと思います。

自治体間でも経済的な格差はありますが、経済の格差以上に深刻な問題は、希望の格差が生まれないようにすることと私どもは言っています。やはり将来の展望、子どもが希望や未来を作ります。そこにどのような施策を打つのかということが今問われているのではないかと思います。

1部の方でも2つの自治体、奈義町の方から子育て支援を中心に、そして安芸市の方から、出逢いコンシェルジュということで、それぞれの取組をご報告をいただき、活発な議論がなされたところです。そこで今度は、2部ではまた違う市町からの事例から学ばせていただきたいと思っております。最初はまさに開催県であります、千葉県旭市の米本市長からお願いいたします。

千葉県旭市長

米本 弥一郎

(1頁)

はい改めまして、千葉県旭市長の米本でございます。このたびはこのような機会をいただき、誠にありがとうございます。本日は、本市が少子高齢化による人口減少対策の一つとして取り組んでいる生涯活躍のまち・みらいあさひについてご紹介いたします。

(2頁)

まずは旭市の概要についてご紹介いたします。旭市は、千葉県の北東部に位置しております。九十九里海岸に面し、温暖な気候に恵まれており、人口は6万2,000人ほどで

す。主な産業は農業で、その農業を中心に商業、工業、漁業などがバランスよく発展しています。特に農業については、農業産出額が全国第8位、また豚肉の出荷額は全国第2位となっており、他にも野菜や果物、新鮮な魚介類など豊富な地産食材や豊かな自然のあふれる町でございます。

(3頁)

本市のもう一つの特徴は、全国トップクラスの公立病院である旭中央病院があるということです。ベッド数は約1,000床、医師280人、職員は2,000人以上という大きな病院で、24時間365日対応の救命救急センターも併設しており、大学病院クラスの規模と機能を持った本市だけではなく、地域医療の核となる基幹病院でございます。

(4頁)

次に、本市の人口です。本市がこの事業に取り組むことになった背景には、人口減少があります。このグラフは、本年の本市の人口の推移を表したもので、ピークである平成7年、1995年の7万1,000人ほどの人口が、2060年にはその約半分まで減少してしまうという厳しい推計結果が出されています。

(5頁)

一方でこちらの左上の表をご覧ください。人口減少率などを近隣自治体と比較してみると、本市の人口減少率はマイナス10.7%と厳しい数値ではありますが、その他の指標も含め、近隣自治体よりやや緩やかな状況となっています。

では、近隣と何が違うのかということですが、大きな要因として考えられるのが、旭中央病院の存在です。旭市民にとって、この病院は安心の核というだけでなく、地域の特に関心する若い人たちにとって非常に大きな雇用の場となっており、このことが旭市の人口減少を緩やかにしている要因の一つとなっています。

そこで、本市の強みである旭中央病院を核として、新たな拠点作りを進めていこうということで、平成27年度から、本事業の検討を開始いたしました。

(6頁)

旭市版「生涯活躍のまち」の事業コンセプトです。

旭市にしかない・旭市ならではの”魅力とライフスタイル”の創出・提供です。本事業の名称にもなっている、生涯活躍のまちですが、これは国の地方創生メニューの1つで、シニアの地方移住促進の政策として始めたものです。

しかしながら、本市では検討段階から事業のターゲットを、シニアだけではなく、全世代と捉え、地域の宝である旭中央病院を核とした、多世代交流拠点作りをコンセプトとして検討を始めました。具体的には、旭中央病院の隣、約3.5ヘクタールの土地に安心、交流、暮らしといった機能を持つ新たな町を官民連携事業で開発するプロジェクトとして作っていかうというものでございます。

(7頁)

ここからは多世代交流拠点、みらいあさひの具体的な内容についてご紹介いたします。

(8頁)

はじめに、事業主体です。このプロジェクトの事業主体となる民間事業者は、イオンタウン株式会社を代表企業として、市内企業を含めた、ご覧の4社で、この4社と旭市、旭中央病院がタッグを組んで町づくりを推進しています。

(9頁)

次にこちらが新たなまち、みらいあさひの全体イメージです。手前に広がるのが、令和4年にオープンしたイオンタウン株式会社による商業施設です。この2階部分の行政コミュニティゾーンに市が設置する多世代交流施設「おひさまテラス」があります。また、この奥は、居住ゾーンとなっており、特別養護老人ホームなどが整備される計画となっています。

(10頁)

現在の写真でございます。商業施設では、県内最大級の無印良品や、地元企業が出店している他、歯科クリニックやフィットネスなどの健康的な暮らしを支える店舗などもございます。

(11頁)

また、現在この施設の中では、高齢者のデイサービスも開業しています。そして今年度中には特別養護老人ホームが新たに開設予定となっています。

(12頁)

次にまちづくり組織についてご紹介します。

本事業のグループ4社では、一般社団法人みらいあさひを設立しております。さらに右側ですが、この法人の活動をサポートするための組織として、みらいあさひ協議会を

設立し、市や旭中央病院、商工会など、各種団体が一体となって連携をしています。ここまでが生涯活躍のまち・みらいあさひのまちづくり全般のご紹介でございます。

(13 頁)

ここからはみらいあさひの中の交流の中核を担う、多世代交流施設おひさまテラスについてご紹介いたします。上の”子どもを中心に据えた未来創造”をテーマとした施設でございます。

(14 頁)

こちらがフロアマップです。館内は中央にあるフリースペースと、有料のレンタルスペースがあります。スペースにはカフェやキッチンスタジオの他、クラフトルームやダンス、ミュージックスタジオ、また子どもが一時預かりができるベビーキャンプなど、様々な機能を備えた、少し欲張った施設となっています。

(15 頁)

館内の様子はこのような感じですよ。こちらが全体を写したものでございます。

(16 頁)

次にこちらが、子どもたちが遊べる屋内公園プレイングパブリックや、自由に学習などができるラーニングパブリックなどの、それぞれのスペースの様子でございます。

(17 頁)

続いて、おひさまテラスの施設概要です。ご覧のとおり、4段目にあるように、この施設の運営は、イオンタウン株式会社への指定管理によって行っております。

(18 頁)

このコンセプトですが、みらいあさひでは、全世代をターゲットにした、ごちゃまぜのコミュニティ作りを目指しており、その実現のための鍵として子どもたちに目を向けました。子育てを通じて、まちの人々が繋がり、支え合い、ともに育む場として、子どもたちだけではなく、子育て世代からシニアの方々まで、世代を超えた交流や活躍の機会を生み出す場。そんなことを目指したのがこのおひさまテラスでございます。

(19 頁)

こちらはおひさまテラスのコンセプトを詳しくイメージ化したものです。真ん中に子育てがありますが、子どもたちが生き生きとした大人に囲まれ、その大人たちの姿を見せることができる状態を良い子育てと考え、それにより個が育ち、そしてまちを育てていきたいと考えております。

(20 頁)

こうしたコンセプトのもと、おひさまテラスでは、この写真のように施設が持つ様々な機能を活用しながら事業を行っております。主催するイベント/コンテンツは、年間で130件以上となり、クラフトルームを活用した子ども創造部、地元のプロミュージシャンによるベース、ギターやドラムスの演奏指導などもあります。それ以外にも、市民の皆さんが主体となり、催しているものも多数ございます。

(21 頁)

さらに、旭中央病院やテナントの出店事業者、地域の団体等と連携しながら、病院まつり、親子和菓子教室、薬剤師職業体験など様々なイベントを開催し、交流を生み出してきました。

(22 頁、23 頁)

こうした取組が評価され、おかげさまでたくさんの取材やメディアなどに取り上げていただきました。また、視察も受け入れております。このようにおひさまテラスでは、イベント等をスポット的にも実施しておりますが、常に大切にしていることは、こちら「日常をつくる」ということでございます。

(24 頁)

公共施設というと、利用者の偏りが生まれがちになります。ですが、この写真にあるように、おひさまテラスでは、多世代が同じ空間で過ごすことが、ごく自然になり始めています。この自然な集まりこそが日常をつくるということだと考えております。

(25 頁)

次におひさまテラスでの特徴的な取組をご紹介します。

初めに、ローカルチャレンジャーという取組です。これは趣味や特技を生かして、地域貢献や小商いをやってみたい方などを対象に、講座を実施しているもので、子どもを持つ女性もたくさん受講していただいております。

(26 頁、27 頁)

これは一例ですが、女性の受講者の中には、この写真のように、受講者仲間で集まり、公園でマルシェを開催したり、また地域の人が親子で集まれる場所を作りたいという受講者が、このように新たな空間を作ったりするなど、それぞれが自己実現の一步を踏み出しております。

(28 頁、29 頁)

他にも毎年4月には、施設利用者の皆さんと、おひテラ文化祭と題したイベントを開催しています。こちらがその写真です。スタジオなどの利用者さんが日頃の練習成果を披露、また講師になるなど一緒になって多世代交流の場を作っています。

このようにおひさまテラスでは、様々な取組を行っており、おかげさまで令和4年度の来場者数は、商業施設と同時オープン之年ということもあり、年間25万4,000人、令和5年度も18万人以上の皆さんに訪れていただいております。

(30 頁)

ここまでおひさまテラスの活動を中心にご紹介いたしました。ご覧いただいたとおり、この生涯活躍のまち・みらいあさひは、子どもを中心に据え、その周りにいる大人たちも一緒に楽しみながら成長していける、そんな場所にしたいと考えています。生涯活躍のまち・みらいあさひは、施設が出来上がればそれで完成というものではありません。ここみらいあさひに子どもからシニアまで様々な世代の人々が集い、交流が生まれることで、人が育ち、町が育っていくこと。そうして、ここで生まれた活力が、旭市全体へ広がっていくことが最も重要です。

ここまでご紹介したような、みらいあさひでの様々な取組を通じて、旭市全体が活性化し、今後、本市がさらに子育てしやすい町となっていくことを目指していきたいと考えております。以上が、本市が取り組んでいる生涯活躍のまち・みらいあさひのご紹介でございます。ご清聴ありがとうございました。

秋田さん：米本市長、生涯活躍のまち・みらいあさひということで、病院、またおひさまテラスを中心にしたまちづくり、活力あるまちづくり、こども家庭庁ではこどもまんなか社会ということをおっしゃっていますが、まさにその具体の姿というものを、子どもを中心に多世代の方たちが集い、交わるような町の姿をお話しいただきました。

それでは続きまして、今度は奈良県の三宅町の森田町長からお話をお願いいたします。

奈良県三宅町長

森田 浩司

(1頁)

はい。ありがとうございます。全国で2番目に小さい町 奈良県三宅町長の森田と申します。本日は小さい町の取組というところで、様々お話させていただけたらと思います。本日は質問NGなしで答えますので、ぜひ会場の方からどしどしとご質問いただけたらと思いますので、よろしく願いいたします。

リアクションがあると喜ぶタイプなので、今日、来る途中、電車を乗り間違えてしまい、ギリギリ間に合いまして、ほっとしているところからスタートです。

(2頁)

では、始めさせていただきます。三宅町は奈良県民の8割が知らない町となっています。小さすぎて、通っているが、三宅だったのだという形で、奈良県民はほとんど知らないのですが、ここが三宅町ですと言うと、ああと言われる場所です。4.06 平方 km で、奈良公園よりも小さい町です。皆さんイメージしていただくと、関空が10ヘクタールくらいあるため、三宅町2つより、関空の方が大きいという、本当にコンパクトな町になっています。そんな町ですが、自治体では珍しく、ビジョンミッションバリューというものを掲げながら、まちづくりを行っています。これは住民さんや職員さんと同じ方向を向いて、まちづくりをしていくために作らせていただきました。

ビジョンとしては、自分らしくハッピーにスモールタウンということで、自分らしい選択や挑戦ができるウェルビーイングの高い暮らしができるまちを目指していこうと、そしてミッションがあります。三宅町役場の職員は何のために仕事をしているのかというところで、まちの夢の伴走者、皆さんのチャレンジを伴走する、そして、新たな価値を共創し、ともに成長し続けていくというのが、この三宅町役場で大事にしていることです。

そしてバリューです。対話・挑戦・失敗と行政に珍しく、失敗を入れています。これも職員さんから、挑戦しても失敗して怒られたらやる気がなくなりますという意見が出てきて、それはそうだと思います、失敗を恐れずにチャレンジをした人が称えられる文化を作っていきたい。そして、失敗を経験に変えることがすごく大事です。イチロー選手も打率3割ですが、行政が10割バッターになれるわけがないということで、3割当たったらいいいということで、職員とともに、チャレンジを続けています。

そんな小さな三宅町ですが、野球のグローブを100年以上作っています。100年間以上野球のグローブを作っており、プロの選手のグローブや、スパイクを作るなど、最近ですと、筒香選手のスパイクを作っている職人さんがいます。

そして1,500年以上、お米を育てている地域になっており、奈良平野の真ん中ぐらいで坂のない町なのですが、盛り上がっているところは、ほとんど古墳で、人のお墓の上で暮らしている三宅町でございます。

(3頁、4頁、5頁)

ここは三宅町のデータなので、飛ばしていきます。見ておいてください。皆さんとともに、ほぼ社会増減も含め、人口減少で過疎になっているというところで示させていただいております。

(6頁)

そんな三宅町で去年驚いたのが、職員が焦ってきたのですが、子どもの数が40人超えましたと言いき、コロナ禍で落ち込んでいたのですが、7、8年ぶりに40人を超えるということで、計算すると、合計特殊出生率が単年ですが、1.43になり、何があったのかと僕たちも全然理由はわからず、職員さんと、なんだろうという話をしているのですが、今年は30人から大体35人でコロナ前の平均に戻るかという話をしているのですが、特徴的なのがその30から35人の多子世帯がすごいというところで、3分の1が3子目以上になっているということで、多子世帯が増えており、一人っ子が本当に少ないので、僕も今子育てをしているのですが、4歳と1歳の子どもがいるというところで、保育所に毎日送り迎えに行くのですが、本当に兄弟が多いと、4人、多いところで5人という家庭がすごく増えてきていると思います。その家庭を見ると、みんな楽しそうです。結構笑顔で、かなり皆さん楽しそうに子育てされているというのが印象かと思っています。

(7頁)

このお話をいただいたときに、意識が変わったのか、何が変わったのかと職員とずっと話していたのですが、データとしてあったのがこちらで、子育て支援に関するニーズ調査ということで、子育て支援の計画アンケートをとったときに、令和1年から令和5年でとても変わっていました。就学前で81.2%が子育てしやすいと言っており、小学生の数字も非常に増えており、71.7%が子育てしやすいと言っている中で、ここの意識の変化がもう1人、もう2人というところに繋がっているのではといった感じでした。

(8頁)

これは今回のイベント登壇に合わせて、職員さんと地域おこし協力隊が住民さんにインタビューを取ってくれました。これを見ると、あの人だ、誰々さんだというのがわかるぐらいの距離感で行政運営をしています。これを見ると、やはりコミュニティが大事というところと、三宅町出身のお母さんが帰ってきているところが、すごく特徴的だと

思い、女性が帰ってくる町ではなかったのですが、だんだん帰ってきてくれるようになっていくところと、子育てコストが低いというところはあるのですが、これはまた後ほど説明させていただきます。

(9頁、10頁)

今回、職員とも話し、三宅町の特徴でよかったもの、これだというものは、小ささを生かしたきめ細やかな寄り添い型の支援です。行政と住民との距離感、小さい町だからこそその Small is ~を大事にし、小さい強みをどんどん伸ばしていくことをやっています。この写真ですが、下は、地域おこし協力隊がスナックをやってくれたのですが、ここは声の大きい課長がおり、隣は町会議員の方、うちの職員となぜか教育長まで飲みに行っており、僕も飲み会に参加させていただき、こんな距離感で住民さんとの対話をさせていただいております。ここで出る意見は、飲みながらですが、クレームではなく、建設的な前向きなご意見をいただけるので、行政もこんなものを考えているのですがどうですかと話し、ダメ出しやそれ良いと言っていただくなど、対話を大事にしながら行政運営をしています。本当に顔の見える関係で名前と顔が一致する住民さんという距離感で、あきちゃんと言うおじさんがいるのですが、そのような名前と顔が一致するような距離感で、子どもたちともそういう形で町長と呼ばれて、よく絡まれます。はい。そんな距離感でやっていることが僕たちの強みだと思っています。

(11頁)

小さいからこそスピード、スピードを持って行政運営をしようということで、まずやってみる、やってみてダメだったらやめようと職員によく言っていますが、まずやってみないと何も変わらないのでやってみようということを大事にしながら進めています。今までにない、自分たちでは難しいため、人の力を借りようと、小さい町だからこそ、民間も町外の人々の力も借りて、子育てだけでなく、町の運営自体をやっていこうということで、やらせていただいております。

先ほど、アンケートでもありましたが、子育てのコストというところなのですが、1子目の所得制限、保育料を撤廃しました。これ何かというと、経済的にどうこうではなく、不公平感が嫌というところで、頑張っているのに、同じサービスを受けているのにかかるお金が違うというところで、働けば働くだけ損しているのではないかというのも私も感じており、そういう声もありましたので、一律7,000円にしよう、一番下に合わせようということで、所得制限を撤廃することで、子育て世代の可処分所得を上げていくことで、2子目、3子目は子どもたちに保護者の方々がお金を子どもたちに使ってほしいということで、これをさせていただきました。

基本的に三宅町は、子育て施策の無償化をしないという方向で、必ず1子目はもらおうと、多子世帯の2子、3子を支援していこうというところで、給食費なども1子目は

しておらず、親がしっかり責任を持つということも大事にしていかななくてはいけないと感じています。

私も今保育所に4歳の子と1歳の子がいるのですが、先ほども手ぶら登園の導入があったのですが、三宅町は全国の公立園で一番先に手ぶら登園を導入し、オムツを持って行かない、持って帰らない制度を導入しました。これはすごく面倒でしたので、オムツ替えて持って帰っても、何のために持って帰っているのかわからないでやっており、これをやめることにしました。これについては何十年も声があり、やめたいと思い、職員と検討しながらやめることができました。

三宅町は小児科が町の中になく、休日夜間のオンライン診療というところで、ファストドクターさんと組んで、診察をできるようにしたことと、薬局が薬を渡してくれるということができ、夜間に病院に行っても、待たされるだけ待たされ、結局何も処置できないというのがあるため、こういったサービスを活用してもらうことで、すごく助かったという声もだんだんと大きくなってきています。

(12頁)

病院に行っていかわからない不安なところの相談というところは、産婦人科小児科オンラインという、Kids Publicさんと一緒にさせていただいたというところで、オンラインを使いながら、様々な民間サービスを使い、自分たちの面倒くさいを自分事として、面倒くさいを解決したいという部分があり、今保育所では布団を持って行くのをやめようという実証実験をしているのですが、私の下の子どもが対象で、とても楽で、何が楽かというのは、土日の時間が楽というのがすごくわかりました。布団を干さなくていい、天気を気にしなくていいなど、あのストレスは大分あったと、1人目と2人目で全然違うというのを、自らも体験しながら、そういった施策作りをしているのと、きめ細やかさで言うと、子どもが生まれたときに、奥さんが言ったのですが、1人目に来てくれた助産師さんが来てくれる。これはわざとやっているのかと職員さんに聞くと、そうなんです。お母さんが知らない人が来るとすごく不安になるため、1人目の人と一緒の人がいいというのを職員さんが聞いてきてくれて、そうしたい場合、できる限り1人目と同じ、2人目も3人目もそうですが、同じ人をというところでさせていただいております。

最後になりますが、子育て施策、少子化対策というより、私は三宅町らしい豊かな暮らしとはなんだろう、豊かな生活とはなんだろうともう1回皆さんで考え直す時期に来ていると感じています。お金がたくさんあったら幸せか、物がたくさんあったら幸せかという時代ではなくなり、経済もそうで、人口減少社会にいく、シュリンクしていく世の中に、大きさに合った、小さくなっていく社会に合わせたこれからのまちづくりが、大事だと思っており、そういった取組を、皆さんとディスカッションできたらと思います。ありがとうございます。

秋田さん：森田町長ありがとうございます。町の小ささを逆転的に本当に強みに生かし、すぐにいろいろなことをされている。それによって、1人目ではなく、2人目、3人目と多子世帯を増やすという形での、少子化へのチャレンジもされている。これはよく言われることで、おそらく1人お持ちの方が2人目、あるいは3人目を産む方が、持たないという方に比べて、出生率が高くなるという話がデータでも出ております。そのあたりをお示しいただいたと思います。

この後、皆様方からご質問をいただきたいと思うのですが、せっかくですので、ご発表いただいたお二人が、相互に人口規模や様々な立地条件は違いますが、聞かれてどんなことを感じられたのかを、まずは米本市長から、森田町長の取組についてご感想をお願いいたします。

米本市長：はい。森田町長、大変ありがとうございました。3点ほど申し上げます。まずは皆さん、資料もお持ちだと思いますが、裏表紙のSmall is 四角でおそらく、森田町長はSmall is をキーワードにされていると思いますが、僕がここに入れるとしたら、Small is Beautiful です。

もう50年ほど前になりますが、イギリスのシューマッハという経済学者が、Small is Beautiful という書籍を著しています。ここでは、大量消費を幸福度の指標とする、現代経済学や化学万能主義に疑問を投げかけるという本でございました。

まさに人口減少は、必ずしも全て悪いことではなく、例えば、1人あたりの環境を、森林面積や公園面積、綺麗な空気の量などの1人当たりの量が増えていくという面もあると思います。ただ一方でそれを維持していく公共施設、インフラを維持していくという大変さもあると思うのですが、いたずらに少子化対策という言葉に踊らされることなく、プラスの面も見えていくことは、大変重要なことだと改めて理解をいたしました。

それから7ページにございます、子育てしやすいと回答した割合が令和元年に比べ、5年大きく増えているということでございます。最近のオープンデータで、出所を忘れてしまいましたが、各町の相対評価と絶対評価を比べた場合、町の人たちが自分の町を絶対評価よりも良い評価を出している。そういった町は人口が減らない、場合によっては増える。自分たちの町をいい町だと市民の皆さん、町民の皆さんが思ってくれるということが大事で、僕も旭市では、全国に負けない子育て支援をしていると思っていますが、まだまだ市民の皆さんがそれを実感していない。自分のこととして理解されていない。隣よりはいいくらいのことなのですが、おそらく全国でもトップレベルの子育て支援をしていますので、そういったことをもっと市民のインナープロモーションといいますか、市民の皆さんに知ってもらおう努力が大事かと思いました。

それから3点目ですが、2ページのバリューで失敗を挙げてらっしゃるということは、本当に素晴らしいことで、どうしても我々行政を預かるものとしては、無謬性というも

のを大事にしたいくなり、僕も、新しい事業ですので、トライアンドエラーですよと言われたことがあります。エラーはやめてくれと言いましたが、これはおそらく、町長さんの性格や、明るさから来ているのだと思いますが、僕は割と慎重なので、新しい事業をやる時には、かなりエビデンスを求めたり、これまでの実績を調べたりということをやります。その代わり、始めたら諦めずに続けたいと思っております。大変ありがとうございました。

秋田さん：ありがとうございます。3点の強みを、感想として言っていただきました。やはりインナーで相対的よりも、うちで満足度が高いことの大切さと、NTTさんのデータで、全国で持続可能な幸福なまちというのは、一体何かというようなことの中でも出されていたと思います。3つの、失敗、本当に行政も、どこも今社会が失敗を許しにくい社会になっているところに大きな課題があるところをご指摘いただきました。

それでは続きまして、今度は、森田町長の方から旭市の取組についてお願いいたします。

森田町長：ありがとうございます。貴重なお話ありがとうございました。おひさまテラスがすごいと思うのと、行政が一番苦手としているところを、うまく民間と組んで、この先にあるのが住民さんの顔や暮らしというところはすごく見えるというところで、自分たちだけでやる時代はもはや終わったというところで、強みを生かしてどう連携していくかということが非常に大事だと思いますが、ただ一方で僕たちがよく言われるのが、なんでそこなのかと言われます。これをもう少し寛容にしていき、誰と組むかが大事だということをしっかりと作り上げていかないと、これからこういった本当に使われる施設であったり、住民さんがあってよかったと言ってもらえる施設というところが、なかなかできなくなるため、誰とやってもできるわけではなく、このメンバーだったからできたのだろうとすごく感じたため、そういったところでは、新たな方法で誰とやるかをこれから大事にしていくことを作り上げていく必要性を強くお話を聞きながら改めて感じました。

秋田さん：ありがとうございます。誰とやっていくのかということが、まさにビジョンをどう実現できるのか、ミッションやバリューを共有できるのかというようなご指摘かと思ひ、先に住民の顔が見えるということは、すごく重要なことだと思います。それぞれに空間、おひさまテラスの話がございましたが、どう空間を安心空間と同時に面白くわくわくしながら、それが幸せな空間として、まちづくりの象徴やシンボルになっていくかということが問われるのかと思うところであります。私の方から先に一点だけご質問をさせていただこうと思います。

今日はこの分科会の前に、デジタルという話がありました。これからのデジタル化のDX社会において、各自治体で、少子化に対応し、どんな工夫がデジタルを用いてできるのかということ、前の第1部の分科会でも、ご質問させていただいたのですが、

やはりそれでもそれぞれの自治体で違っておりました。今度は2部の方でまた伺いたいと思います。それでは先に米本市長の方から伺ってよろしいでしょうか。

米本市長：はい。旭市の場合はDX化、デジタル化については遅れている方だという認識でおり、この4月から外部の専門人材を受け入れて、DX化を進めているところです。このDX化については、2つポイントがあると思っております。

一つは、DXのデジタルと同じぐらいに、Xの方のトランスフォーメーション、こちらの変革改善、あるいは最適化といったことも大事だと思っております。先ほどの庄司先生のお話にありましたが、アナログの部分の変革、最適化ということが必要であり、そのためにデジタルを活用する。それが大事かと思っております。

それから二つ目として、市役所内部だけのデジタル化、DX化だけでなく、市全体のDX化、デジタルでいろいろな町の課題を解決していく。例えば先ほどもありましたが、保育所の入所申し込みパソコン、スマートフォンから申し込みができるということになれば、働く女性や、お父さんも含めて、入所の申請に仕事を休んで市役所まで来なくて済む。そういったデジタルを庁内だけでなく地域全体、市全体へ広げていくということで今進めております。

秋田さん：ありがとうございます。2つの点で、デジタルと同時にトランスフォーメーションやイノベーションの重要性をお話してくださいました。

国の方では令和8年度から、保育所や誰でも通園などの、入所からいろいろな申し込み、予約の申し込み等の総合システムを今設計しており、来年度にパイロットをやり、8年から本格実施していく予定になっております。それではお願いいたします。

森田町長：ありがとうございます。本当におっしゃるとおり、Xが大事だなというのは、Dはたまたま手段なだけであるというところは、共通の思いだと思っております。

あともう1個自分ごととして考え、面倒くさいをどうしたらいいかというのを考えた方がいいなというので、当たり前に行っていることを疑わないといけないというところはすごくあるのではと思います。例えば保育料だけでなく、保育所の諸費というか、絵本代などで小銭のやり取りが多かったのですが、これがとても面倒だと思っており、職員に聞くと、職員もその事務は大変ですといい、なぜ引き落としにしないのか、こういう細かいこともわからないですが、職員もそうですが、住民さんも不便だと感じていることの合意点はたくさんあると思いき、そこについて、担当職員はすごくよく知っているの、自分がサービスを受ける側になったときの視点を持つと、すごく進むのではないかと。70歳以上のスマホ保有率とLINEを使える率はほぼ100%だとコロナのときにすごく思い、大体お孫さんの写真のやり取りはLINEなので、LINEは使えるというのがあり、使えない人の方が圧倒的に少ないということを考えて、政策設計を

していかないといけない。使えない人には、今までどおりのやり方を残せばいいだけで、圧倒的に使える人が増えているという認識でやっていくことも大事かと思います。

秋田さん：ありがとうございます。面倒くさいを住民の目線から、もう一度いろいろなところでデジタル化をという、まさに今のお話や先ほどのお話を聞いて、私は保育園で娘2人のオムツを持ち帰った、小学校に行ったら毎週運動靴を洗っていたなど、後で考えればいろいろな面倒くさいがあったと思いながら、時代も変わり、どんどんいい方向に向かっていると思います。でも子どもが減っているのでどうするかというのが大きな課題でございます。

ぜひ、皆様の方からご質問を、お手を挙げていただけましたら幸いです。口火をどなたかが切っていただけると、では、お願いいたします。それでは、葉山町長お願いします。

質問者：はい。ご指名ありがとうございます。

神奈川県葉山市から参りました山梨でございます。米本市長また、森田町長と、大変素晴らしいお話ありがとうございました。先ほど1部の方でも、奥町長も横山市長も、大変素晴らしい取組をされていらっしゃるしまして、我々自治体としてという視点で少しお伺いしたいのですが、どうしても少子化対策をしていると、少子化の親に対する支援対策という考え方と、我々本来である社会福祉、子育て支援に対する、子どもに対する福祉、子どもの安全安心を守るという視点の2点が錯綜する瞬間があり、子どもを産んでほしいという問題、少子化対策はどこにあるのだろうかというところに、一瞬迷いを生じるときがあります。またそこに政治家としての立場があるので、有権者の方々に受け止めてもらいたい。現有権者はどう受け止めるのかと考えると同時に、将来のまちがどうなっていくかということで、若干ジレンマを感じるころがあります。そこにぜひ国の大きな指針が欲しいなと思うときがあり、例えば国全体で給食費の無料化、医療費は全部国が無料化する、日本の国は少子化対策100%の国だと発信してもらうことはできないのかと悩む瞬間がたくさんあります。

先ほど森田さんの後半で、たとえ縮小してシュリンクしていても、ハッピーな日本の暮らしがあればいいという投げかけを聞いた気がしたのですが、その点、自治体に関わっている方向性を探るときに、同じような悩みを抱えているのかということと、秋田先生もいらっしゃいますので、ぜひ国をこれからどういう方針で、少子化も前提とした国作りをしていくのか、それに抗うようにサステナビリティという言葉を使い、我々自治体をまだまだ応援しながら、自治体それぞれの力に頼っていくのだろうかというその方向だけでもいただけると、我々のモチベーションもなると思いますがいかがでしょうか。

秋田さん：ありがとうございます。3人への質問のような気がいたしますが、それではまず、市長からよろしいでしょうか。

米本市長：はい。人口減少対策は旭市としても進めています、実際にこれから人口が増えていくのかというと、大変難しいことではないかと思っております。旭市でも小・中学校の再編事業が進んでおり、ただ、私達が今できることとしては、人口減少のスピードを少しでも緩やかにしていき、人口減少という社会になったときも、それに対応できる施設設備や、あるいは私達の、先ほどのSmall is Beautifulではありませんが、そういったものの見方、考え方を醸成していくという、そのために少しでも時間を稼いでいくという視点も必要ではないかと思っております。

子育て支援にするか、子ども支援にするかということと言いますと、やはりこれは本当に少子化はあれかこれかであることではなく、ある意味あれもこれもやらなければなかなか進まない政策だと思えます。ただ、とは言うものの、財政には限りがあるため、その中で皆さんの市町村で、どこに力を入れていくか、優先順位を決めていくかということも必要ではないかと考えています。

秋田さん：ありがとうございます。お願いいたします。

森田町長：とても的確な質問というか、刺さると思いつつ、僕自身もジレンマを感じます。例えば給食費の無償化は誰のためだろうというのを見ると、多分保護者のためになるが、これは子育て支援なのか疑問に思えます。子どもの目線からすると、別にどちらでもいいとなる。それより子どもから見ると、質と量をしっかりしてほしいという話になると思ひ、ここのすみ分けをしっかりとした上で、議論をしないと僕は今の、とりあえず無償化しておけば良いという風潮が駄目だと思うことと、子どもからの目線で言うと、お金がなくても、給食は絶対食べられるようにするというのであれば、各市町村の財政規模に応じて、不公平感があってはならないという方向になるだろうし、そういった丁寧な議論が必要なのではないかと思っております。でないと、子ども目線で見ると、自分の住んでいるところは給食費を払って給食が食べられないですという子がいる社会がいいのか、国全体でそういう子を絶対救うと思う方向で動くのかという大きな議論が必要、方向性が必要かと思うため、誰の目線で見るとかというのはすごく大事だと思っております。

今日も書かせていただいておりますが、少子化対策という言葉だけで、何か全てを片付けられている気がしており、そうでなく、もっと本質的な誰を救わないといけないのか、誰の目線なのかということと少子化対策という言葉だけではない、今のご質問のようなどころをしっかりとこのメンバーを始め、しっかり議論することが大事かと思っております。

秋田さん：ありがとうございます。私の方もまず人口減少に関して、米本市長が言われたように、ある一定は割り込まないということが、それぞれの自治体を支えていく上では、重要なことだと考えており、魅力的なまちにと思っています。でも、今の子育て支援と子どものための、誰のためかというところで、私は東京都の子ども未来会議の会長もいたしており、実は小池知事にお伝えしたのは、もう子育て支援も大事ですが、子育て支援をしませんか。とお話をしました。子どもが育っていく、そのニコニコしている顔を見ることが親の喜びになるような施策にお金を、もう東京都の場合は子育て支援をいろいろやってきているので、子育て支援にしませんかということで、去年からパイロットして、すくわくプロジェクトという、子どもの園に対して、様々な教材費を保育園などはなかなか難しいため、そういった支援を手挙げ方式ですするというようなことを、去年からパイロットで、今年から5年間で、東京都はやはり、保育教育の質を上げるということでやっております。いつも現金給付がいいのか、現物給付がいいのかというのは世界的にも、だんだん現金だけより、現物で長期的な投資をする方がいいのではないかという議論は進んでいるのですが、やはり政治家の方や選挙を考えるなど、いろいろなことがあり、現金支給が強くなっているという状況もわかっています。

でも子ども目線でもう一度、施策全般を見直すということが、こども基本法では、子どもの意見の表明とか主権かというところで大事にされているところかと私自身言われ、確かにその国が、給食費や医療費、特に全てではなく、特に困難な子はそれぞれの自治体がフォローしてくださっていると思いますが、重要などころだと思っています。ありがとうございます。

それでは続きましてお手を挙げていただけると、いかがでしょうか。

質問者：千葉県九十九里町の浅岡と申します。よろしく願いいたします。

三宅町長にお聞きしたいのですが、保育に関してはだいぶ手厚くされているのですが、御町は幼稚園があるのか、あった場合その保育所に通われている子どもたち、親と幼稚園の子どもたち、保護者の格差など、そういった補助の仕方についてあれば教えていただきたいと思います。

森田町長：はい、ありがとうございます。そこについて、三宅町は1園1校、組合立中学を1校運営しているというところで、その園に来ている子どもたちになるのですが、町に住んでいて、外に行っている子どもたちにも同じような対応させていただいております。そういったところで分断を生まないというところでは、そこでしっかりとサポートするというのをさせていただいているのですが、今、年々三宅町の外に出ていく方が減っていているというところも合わせてあり、ほぼ100%三宅の認定こども園に、町内のお子様を預けていただいているというような形に少しずつなってきました。これも満足度の変化が当然あったところかと思っています。

秋田さん：貴重なご質問を、九十九里町長、ありがとうございます。

質問者：ありがとうございます。そうしますと料金設定が九十九里町もこども園なのですが、保育と幼稚園と違いますか。

秋田さん：1号認定のことですね。

質問者：やはり料金的に価格差をつけているのですが、そういうこともなしにやられているということでしょうか。

森田町長：そうですね。1号認定さんは無償化の対象になっており、保育に0から2のところだけが保育料がかかっている状況になるため、そこに関しては必ず同じような状況で対応させていただいているという形になります。

質問者：ありがとうございます。

秋田さん：ありがとうございます。0から2歳のところは自治体独自で無償化をやってらっしゃるところと、そこまではなかなか、財源の問題もありというところがあり、国はそこまでは出せていないというところでもあります。でも今の町長が言われたように、私の知っているところでも、町内の認定こども園を充実させることで、町外に出ていた人がだんだん町の方に通わせるようになってきて、活気が出てきたというような、最初の新たな新設のものをそれは民営なのですが、こんなところにみんな外へ行っているのだから、作っても無理ですと役場の方に言われたそうですが、実際に質の高いものを作ったところ、それが町の誇りになって戻ってきているというところを私は知っております。

ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

森田町長：今日は市長さんや町長さんの質問が多いのですが、職員さんからなかなか質問が来ず、現場の声も聞きたいと思いながら、職員さんでもOKですので、首長ばかりいるから質問してはいけないという空気ではないので、ぜひお願いしたいです。

秋田さん：それでは私の方から一つ伺ってもよろしいでしょうか。

お二方とも、どういうまちを作りたいかということのビジョンのキャッチコピーがとても上手な自治体だなと私は思いました。それが町民や市民の方の理解を得ていく上では、すごく重要で、それからシンボルや象徴的な、どうその自治体をブランディングしていくかというのでしょうか。その独自性を見せて、皆でビジョンを同じ方向に向かうかというところで、どんなことを意識されているのかということと、やはり今も職員さんと話がありましたが、職員さんが皆でまちづくりや、同じ方向を向くための職員の育

成というところでどんなことを配慮されているのかの2点を、よろしければお話を伺わせていただいてもよろしいでしょうか。その間にぜひフロアの方、その次はそちらに行きますのでお考えください。よろしいでしょうか、お願いいたします。

米本市長：はい。旭市ではいわゆるブランディングや、キャッチフレーズについては、言ったもの勝ちと思っています。全国の市町村がまだ言っていないフレーズを使い、ともかく注目を集める。それと同時に私どもの町では、ロケーションツーリズムといいまして、テレビや映画のロケを誘致し、そこにいわゆるロケの聖地を作り、全国から人に集まってもらい、聖地巡りをしてほしいということもしておりますが、まず目立ったもの勝ちかということが一つあると思います。それと職員は、いつもうちの市長はマジで市長かときっと思われていると思うので、ここでは緊張してきちっとしていますが、市役所に行くと、フランクに付き合えればいいですし、本当にうちの職員は優秀で、選ばれて採用された方々なので、本当に実力を発揮させてあげる環境を作る。それが僕の責任であり、仕事かと思っています。失敗はしない方がいいけれど、失敗したときは僕が責任を持ちますといつも言っています。

秋田さん：安心ですね。

米本市長：職員に届いているかどうかわかりませんが、ありがとうございます。

秋田さん：森田町長お願いいたします。

森田町長：ブランディングではないですが、このビジョンもそうなのですが、総合戦略を作るときに、住民さんにいろいろな世代のアンケートを行い、アンケートを返さない世代には保育所に行ったり、直接聞きに行ったりなどをして、大体皆さんが同じようなこと言っているというところと、あと小学生が読んでわかるというところがすごく大事だと思います。町のビジョンなのに子どもたちがわからないというのはなんだというのがすごくあり、わかる言葉でしっかりと伝えるということで、自分らしくハッピースマールタウンと、このスマールの後ろに（すもうーる）という造語を作りましたが、職員さんに造語を入れていいのかと言われ、これで伝わるならOKと言って入れるなど、ミッションバリューに関しても、職員さんの採用試験をするためのペルソナ、どんな人を採用したいかの話し合いをした中で、1年目から部長級まで10何人が同じことを言ったため、これを言葉にしてみようということで、挑戦ができないのは、失敗したら怒られるから嫌だとみんな言っているので、それを大事にしてしまおうということで、僕が作ったというより、皆の意見をわかりやすく言葉にしたというのが特徴的かというところと、職員さんには市長もおっしゃったとおり、失敗しても責任は取るというところと、この失敗は本当に入れるのかと職員からすごく言われましたが、僕は住民さんお話しに行くからと言って、無理やり入れていただきました。職員は本当に嫌がりました。この失敗を行政のもので入れるのかと。入れて言い続けたら、職員さんが町長も失敗しているからやってみればと部長級が若い子に言い出し、住民さんが、町が失敗していいって

言っているから、自分らもやろうと、2、3年かけてずっと言い続けていたら、少しずつ変化が起こってきているのと、職員さんとは雑談をたくさんしています。大体、僕が新しいことやろうとしたときは、絶対嫌ですというところからスタートするので、その嫌を、こうやったらできるのではという対話をすごく、職員さんとも時間をかけながらしっかり話し合いをします。小さな役場なので、すぐに話し合いの場が作れるため、本当にそういうスピード感を大事にしているというところと、本当にいろいろな企業さんが来られるのですが、来た瞬間にその日のうちには僕の耳に入っており、そういう小さいからこそのスピード感というところが、生き残り戦略としては、ブランディングの部分ではしっかりとやっていくというところは意識をしています。

秋田さん：はい、ありがとうございます。これからは多分スピーディー感というのはモデルだけではなく、どこでも問われてくるところなのかと思いつつ聞かせていただきました。また小学生でも分かるというのは、役所の中では珍しいかもしれませんが、こども家庭庁は全て、いろいろなものが小学生の目線や、子どもの目線からわかるかというのが、実はそのわかりやすい版というのを私は使い、教員や職員の方たちの研修などに使うと一番よくわかると言ってくださり、大人版や行政の難しい説明では聞いてくださらない方たちが、動画とそのわかりやすい版だと、皆さん、同じ方向を見てくださるので、やっぱり今後どうやって、真髓のエッセンスを伝えるようなリーフレットを作っていくかということも重要かと思うところでございます。

森田町長：そうですね。そういうところで言うと、公務員は難しくする天才ですなんであんなに難しく書けるのだらうといつも思います。給与表のテーブルも、書き方の例を見ても、何を書いているのか本当にわからないものがあり、おっしゃるとおりこれをわかりやすくするだけで、生活も仕事も変わるのではないかという仮説を持っています。

秋田さん：ありがとうございます。奥が深く、含蓄を多様に読めるように作るということも重要ということもわかりつつでございます。

最後の質問になろうかと思うのですが、いかがでしょう。お一人かお二人挙げていただけますとありがたいです。

質問者：すみません。千葉県で唯一の村、長生村の村長の小高と申します。

おそらく旭市さんとは、千葉県の立地上では同じ九十九里沿いで、うちの方は東京オリンピックでサーフィンをやった一宮町の隣なのですが、東京まで1時間20分、茂原で快速から特急に乗り、1時間で行く距離でございまして、民間の力を使って、イオンがよく勝負してくれたと思うのですが、うちの方は茂原市を中心として、長生郡市で15万いない、15万を切っている都市で、なかなか大手が来ていただけない。

うちの村にも実は17ヘクタールの県の遊んでいる土地があり、ただそれが農地なのでなかなか企業誘致に腰を上げてくれず、何度か知事にもお願いしているのですが、決め文句がないです。おそらくイオンさんがここまで民間投資していただけるには、相当な時間と、それから将来性を考えた計画があったと思うのですが、その辺の経緯を教えてくださいたいのと、森田町長さんには、うちで、やはり子どもが中学生、高校生までは地元に来てくれるのですが、大学や専門学校というところ、千葉、東京に行ってしまう。おそらくそちらも名古屋や大阪に出ていくのではないかと。私は中学生に1年間一コマもらって、君たちが将来村を背負って立つと洗脳しているのですが、なかなか言うことは聞いてくれません。何かUターン、Iターンなど、そういうところで知恵があるようでしたら、お二人には時間がなくて申し訳ないですが、よろしくお願ひしたいと思ひます。

秋田さん：ぜひ、お願ひいたします。

米本市長：イオンタウン株式会社さんは、公募で来ていただきました。その後はもういかに本音で話し合えるかということで、膝詰めの会議を何度も行い、民間の皆さんはぜひ儲けてくださいといった議論を重ねてきたところでございます。

それからいわゆる農地ということで、農地規制をどうクリアするかということでございましたが、私も、農振農用地で、第1種農地で、さらに施工中の土地改良事業の受益地ということで大変網が二重、三重にかかっていたのですが、そこをクリアするには、まず全庁で、生涯活躍のまち構想推進会議という庁内の会議体を組織し、関係部局の、農業だけではなく、都市建設、建設課、上下水道課等々が全体で会議をし、やれない理由ではなくて、やれる理由を考えましょう。特に県との協議では、この事業を実現できるのかどうか、実際に実現しなければいけない事業だという理解をしていただいたということが農地規制に関して、力になったと思っております。

森田町長：UIターンの答えというところなのですが、うちは教育長とも常々話しているのは、三宅町の子どもたちはさっさと出て行けと。世界に飛び出してくれと思ひます。返ってこなくてもそこはそれでいいが、関係性は繋がっておいてほしいと。

例えばうちの町から前澤さんみたいな経営者が出て、住民票を置いてくれるだけですごくありがたいと思ひます。いてくれなくてもいいと思ひていて、ただ自分の町を自慢できるかどうかというのは、すごく大事だと思ひ、自分の町を大好きでいてほしいというのは思ひています。世界に行ったときに、その一人ひとりが広報マンになるため、三宅町はすごい、自分の町はこんなにすごいところだという誇りを持って言うことで、また海外からその町を見に行こうというような、そういう関係作りをしてもらうための、営業マンの子どもたちになってほしいと思ひているため、そういうところではふるさととしては残したい、自慢できるまちを現役世代としてちゃんと僕たちがやらないといけないう思ひています。

秋田さん：どうもありがとうございます。

米本市長：秋田先生にご提案ということで、お願いなのですが、先ほどの第1部でもございましたように、私達市町村としては、できる限りの子育て、子ども支援をやっていると思います。本当に隣近所と競争しながら、いかにお互いが切磋琢磨しながら進めていると思っております。私達も自治体としてできることはここまでで、実際に子どもを産み育てる方、お母さん、お父さんは、民間の企業に勤めている方が圧倒的でございます。

なので、僕は町に出て、市民の皆さん、起業者の皆さんといろいろな話でディスカッションしなくては、まちづくりはできないと言うのですが、商工会の皆さんにお願いすると、結婚休暇を取れるようにしてほしい、出産休暇、育児休暇を取れるようにしてほしいとお願いするのですが、私達はなかなか中小企業でそこまではというようなお話にどうしてもなってしまう。

ただ一方でその事業者の皆様も、もう既に人手不足という認識を持っていて、このまま少子化が進むと、私達の事業の担い手がなくなる、そういった危機感も持ってくださいますので、ぜひここはこども家庭庁で全国的にこどもまんなか社会をどんどん進めていただき、町全体が子育てしやすいまちになっていくような、そんな施策を進めていただけると大変ありがたいです。

秋田さん：ありがとうございます。私は今日、単なるコーディネーターで来ているのですが、こども家庭庁にしっかり持ち帰りたいと思います。あと時間がギリギリになってきているのですが、せっかくなのでぜひお二方に、皆さんに残したいメッセージや、これから自分の市や町で取り組みたいことを一言ずついただけたらと思います。お願いいたします。

米本市長：皆さん、拙い報告でございましたが、ご清聴いただきまして大変ありがとうございます。同じ市町村の長として、町を愛する、村を愛する、そして市を愛する気持ちは、皆一緒だと思っております。お互い連携してこれからもまちづくりに励んでいきたいと思っております。皆さんどうぞよろしく申し上げます。本日はありがとうございました。

森田町長：長時間ありがとうございます。本当に市長が言っていたのが、ここにいる皆さんの総意かと思っておりますので、ぜひ伝えていただき、実現していただきたいと思っておりますし、市町村は本当に疲弊しています。市町村職員は本当に優秀で、頑張っているのですが、限界が来ています。国の給付金の話もそうですが、千葉県知事もXで言っていたのですが、本当にボロボロになっているが、頑張らないといけないという思いは一緒なので、そういうところを今日皆さんと共有できたというのが今回一番素晴らしかったと思います。これからも力を合わせて、子どもたちが笑顔になり、皆さ

んがハッピーになるようなまちづくりをともに進めていきたいと思います。本日はありがとうございました。

秋田さん：本日はどうもありがとうございます。また、フロアからもご質問をいただきましたおかげで、分科会も活性化のあるものになりました。改めて今日は、本当に大変貴重な事例をご報告いただきましたお二人のパネリストに拍手をもって終わりにさせていただきたいと思います。本当にどうもありがとうございました。

司会者：ありがとうございました。